
恋のキューピッド君

わたるくん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋のキューピッド君

【Nコード】

N5716Z

【作者名】

わたるくん

【あらすじ】

高校に入学してから二か月が経った。クラスでの俺の立場と云ったら、教室でゲームをしたり、ラノベを読んだりしているキモいヲタク君。

そんな俺こと、上木幸司のもとに舞い込んできたのは、ヲタクという不本意なレツテルを張りやがった女子の恋愛サポート!?
なんで、そんな嫌いなヤツを助けなくちゃならないんだ！俺は断固拒否するぞ！

絶対、絶対だからな！！

……とか言いつつ、結局巻き込まれる男のお話。

高校生活ってツライよね？（前書き）

他に書いた小説とは違い、初めての一人称に挑戦してみました。
やっぱり恋愛が絡んでくると一人称の方が主人公の思っていること
が表現がしやすかったり（笑）

高校生活ってツライよね？

「なあ、上木のヤツまた教室でゲームやってるぜ？ 友達が一人もいないからって寂しいヤツだよな」

「仕方ないんじゃないか？ あまり人と話さないタイプみたいだし、見た目もダサいじゃん。女子にもキモがられてるみたいだし、あんなヤツと仲良くしてたら、俺たちまで同類だって思われるって」

ハアア……また俺のことを貶す^{けな}声が聞こえてくる。入学してからもう何ヶ月か経ってるのに、アイツ等もよく飽きないよな。そんな教室の扉の前で話なんてしないで、言いたいことがあるなら面と向かって言えってんだ。

「でもよ、上木も災難だよな。一人寂しくゲームなんてやってるから、クラスの女子全員からヲタクって呼ばれて嫌われてるんだぜ？俺なら耐えられないね」

うるせえ、口だけの同情なんていらねえんだよ。女子たちにイビられてないお前等なんかは、俺の気持ちなんて分からないだろうさ。もう、なんていうかね？ 教室の隅で女子グループが集まってヒソヒソ話しているだけで、俺の悪口言われてるような気分になるんだよ。その時はわざと寝たふりなんかしてるが、耳だけは俺の意思に反して、無意識に女子たちの会話を盗み聞きしようとするんだ。

……結局、聞こえないんだけどな。
なっ？ お前らにこの切なくて虚^{むな}しい気持ちを理解できる訳ねえだろ。

「それに……っ!？」

「おい、急にどうしたんだよ……っ!？」

おっと、二人が黙り込んだぞ。これはアレだな。アイツのご登場ってわけか？

「ちょっと、アンタたち。教室のドアの前に立たないでくれる？
ちよー邪魔なんですけど？」

ソプラノボイスの奏でる澄んだ声が聞こえると、一人を先頭にわらわらと数人の女子たちが教室に入ってくる。

長いウェーブがかかった髪は茶色に染められており、校則って何だっけ？ と思わせるほどの足を露出させた短いスカート。おそらく特殊な趣味でもないかぎり、ほとんどの男が可愛いと言っだろう。正直、見た目だけなら雑誌でモデルやってますと言われても信じてしまっくらいだ。

そう、先頭を悠然と陣取る彼女こそが俺の天敵、かすみれんか香澄恋歌だ。

クラスでは、その持ち前の容姿と明るさで人気があるようだが、俺からみたら嫌な女もいいところ。

すべて彼女が悪いとは言わないが、香澄の余計な一言がきっかけで、俺がクラスからハブられる原因になったのは間違いないと思っている。

それは、入学してから二週間が経った昼休みの出来事。

周りは楽しく昼食を取ったりおしゃべりをしている中、俺は未だにクラスで馴染めておらず、暇つぶしでもと教室の片隅で一人ゲームをやっていた時に事は起こった。

最初、特に何の問題もなく坦々とゲームをしていると、途中から誰かの視線を感じ、一時プレイを中断して辺りを見回した。

そして、近くに陣取っていた女子グループがコチラを指し何か話していることに気づく。

俺はすぐさま視線を下ろし、再びゲームを再開したような態度を取り気づいていないフリをするが、さすがに気になるので聞き耳を

立ててみる。

「ねえねえ、上木が一人でゲームやってるよ。アイツって今流行りのヲタクってやつじゃない？」

「ん？ ああ、本当だ。なんか見た目もダサイし、学校にまでゲーム持ってきてくるくらいなんだから相当かもよ？」

「うっわ……それってちょくキモくない？」

「アイツって確か上木って名前だったよね。あんまり話してるところ見たことないし、暗そうなヤツだって思ってたんだあ」

えっ……。俺って今そんな風に見えるの？

さっ、さすがにそれは言いすぎじゃないかな？ 別にアニメとかゲームが嫌いって訳じゃないというか……むしろ好きな方だから間違っではないんだが、ちょっと傷つくな……。

その時は少し嫌な思いをしたな、くらいで済んだはずだった。しかし、

数日が経った時に俺の立場は激変し、クラスのみんなからハブられ始めたのだ。

その理由は後日、明らかとなった。

どうやらあの昼休みの後、香澄の周りにいた取り巻きたちが調子に乗って「上木ってヲタクでキモい」なんて面白がりながら同調し、クラス全体にまでその噂を流したらしい。

香澄まで俺の噂を流したのかは分からないが、彼女の取り巻きの原因なのは間違いなかった。

そこから俺の高校生活の転落が始まったと断言してもいい。

正直、何故それくらいでキモイという烙印まで押されなければならぬのか……俺にはまったく理解ができなかった。最近では、ラノベとかゲームが好きというくらいでヲタク扱いされるんだから、本当に嫌な世の中になったもんだぜと嘆息してしまうくらい。

昔のことを思い出していたら、さっきの男二人組が黙って道を譲ったな。アイツらもクラスじゃあそれほど目立つ立場じゃないからな。香澄恋歌から見ればあまり好まないタイプなんだろうさ。

そんなお互いを嫌っていた関係だったのに、なんだってあんなこと……。

俺は入学してから二ヶ月の時点で、すでに来年のクラス替えを夢見ていたのだ。

それが、あんな横暴ギャルに振り回される高校生活を送るハメになるなんて……誰が想像できただろうか。

すべての始まりは、学校で一番有名であろう、あの先輩から始まったことだった。

高校生活ってツライよね？（後書き）

まだまだ序章もいいところなので、最後までお付き合いしていただけたら嬉しいです。

いつもと変わらない朝？

ピッピッピッピッピッ……。

聞きなれた電子音が鳴り響き、俺はいつものように目を覚ました。重い目蓋を開くと、窓から覗く陽光が目に入ってくる。春から夏に移り変わるうらかな気配により、ベッドから出たくないという衝動に駆られてしまう。だが、カーテンの隙間から漏れ出る眩しさに、否応なしに寝ぼけた意識が覚醒されていく。

「ああ……鬱だ」

すでに、何度このセリフを吐いたかなど記憶にない。

ただ、あの出来事があった日から今日まで、一日一回は言ったとしても、最低六十回は言った計算になる。

これはもうアレじゃね？ 俺の中でベスト・オブ・流行語大賞になっちまう勢いだよ。

……虚しい、虚しいぜ俺。なんで寝起きから一人でアホなこと考えなくちゃならねえんだ。

言葉通り、憂鬱ゆううつな気持ちを抱えたまま起き上がり、支度を始めた。

今日は六月十三日の月曜日だ。

今日から新たな一週間が始まると思うと、気が重くなる。

なぜなら、俺こと、上木幸司かみきこうじはクラスで八ブられているからだ。暴力やイジメとまでは言わないが、女子からはキモイヲタクという不本意な烙印を押され、男子からはそんな女子に嫌われたくないと距離を置かれてしまっている。

その事実を最初に知ったときはショックだった。

今まで友達が多かったとは言わないまでも、小さいころからの付き合いがあるヤツや、同じゲーム好きのヤツなんかと、中学生の時までは楽しく過ごすことができていたのだ。

そんな俺が、家庭の事情によって実家から遠く離れた高校に入学したため、周りに昔から仲の良かった友達が一人もいなくなってしまう。元々、あまり人とコミュニケーションをとる事が得意でない俺としては、初めて出会うヤツに自分から声を掛けることすら躊躇ためらってしまふ。

しかし、そんな俺の事情など知らないかのように、周りの連中は日が経つごとにどんどんグルーピング化していく。そんな、仲のいいグループという強固な防御フィールドに守られたメンバーの中に入っていくなんて、さらに難易度が跳ね上がるだろう。

仕方がないから、一人でも発動できるATフィールドを展開するしかなかった訳だが……アレ？ いま、俺上手いこと言ったよね？ 高校に入学して一週間、俺は『ぼっち』な状況に追い込まれていた。

そんな俺の学校での暇つぶしと言えば、昔から大好きだったゲームである。寂しさを紛らわせるために、仕方なく教室でゲームをプレイしていた時だ。

あの女にしてやられてしまったのは。

その女の名前は

香澄恋歌かすみれんか。

入学した当初から、アイドル顔負けな可愛さと天真爛漫てんしんらんまんな性格で、すぐにクラスで頭角あたまのすみを顕あらわにしていた。

今では女子たちの中心に躍おどり出て、イケてる男子たちに持て囃はやさされている。本人は気づいているのか分からないが、彼女の影響力はクラス全体に浸透し、ただの噂であっても瞬く間に広がってしまうと言っても過言ではないだろう。

…… 実際、俺がその犠牲者第一号なんだからな。

あの時の迂闊うかつな自分を殴うってやりたいぜ。一度イメージが定着したら、そこから抜け出すのは簡単じゃない。

香澄が噂のことをどう思っているかは知らないが、俺からしてみ

れば本当に溜まったもんじゃねえっーの。

そんな状況でも入学から二ヶ月が経った。

慣れとまでは言わないまでも、それが当たり前の日常だと思えるくらいには。

それでも一週間が始まる月曜日の朝は嫌いだ。だいたい、誰が好き^す好んで友達が一人もない学校に行かなくちゃならないんだ。考えただけでも気が滅入るわ。

俺はのろのろと準備を終えて、玄関にたどり着いた。

「ああ……鬱だ」

俺は、再び何度咳いたか分からないセリフを吐きながら、玄関の扉を開けて一歩を踏み出す。

今日もいつもと変わらない生活が始まると思いつい込んだまま。

厄介な先輩とエンカウト？（前書き）

ようやく本筋に入った。

厄介な先輩とエンカウント？

希望である夏休みまで残り一か月に迫った、六月の朝。

玄関から一歩外に出るだけで、今の季節にはまだ早い蒸し暑い熱気に包まれた。

無意識に見上げた空は、雲ひとつない快晴であり、燦々（さんさん）と輝く太陽の光が辺り一面に降り注いでいる。

俺は未だに真新しい制服を着込み、大きく深呼吸をした。

クラスでの嫌な連中から解き放たれ、少しだけ清々しい気分になってくる。さすがに今から学校に向かうまでの道中は、周りを意識する必要もなければ、無理に気を使う必要すらもないだろう。

俺の通う鷺峰^{わしみね}高校は、住んでいるアパートから徒歩三十分の場所にある。本当ならもっと近い場所に住みたかったのだが、両親が友人らの遊び場になるといけないからと、少々離れた賃貸アパートにされてしまった。

今考えると、両親の心配は杞憂^{きゆう}だったかもしれない。

なぜなら、友達のいない俺の家に、誰かが遊びにくるなんてミラクルが起きる訳ないからな。

……あつ、自分で言っつて悲しくなってきた。

入学したばかりの頃は、これから始まる高校生活に淡い期待を抱いていたこともあった。可愛い彼女が出来たらと、大きな夢を抱き^{いだ}つつも、せめて女の子の友達ぐらいならと現実的な希望も持っていた。そんな現実的な夢なのに、どうしてこうなってしまったのか。

……いや、理由は分かるんだけどさ。なんかこう、認めたくないことだつてあるよな？ 理解はしても納得はできないみたいなさ。

通学路を歩いていると、目の前の角から俺の通う高校の制服を着た女の子が顔を出した。長い黒髪をまっすぐに伸ばし、腰のあたりにある毛先が、歩く動きに合わせてユラユラと踊るかのようには舞っ

ている。

俺は彼女のことを知っている。

遠目でも分かるような細く繊細なスタイル。スカートから伸びるスラツとした長い足。すべての男が思わず振り向いてしまうような美しい尊顔。それはまるで、この世の美というものをすべてかき集めたかのような女性。

やとみあかね
弥富朱音さんだ。

彼女のことを、鷲峰高校で知らぬ者はいないだろう。友達がいない俺でも、周りの会話を盗み聞きしているだけで何度その名を聞いたか分らない。

今までこんなに関近で見たことはなかったが、さすがは噂の弥富朱音さんだと納得してしまう。こんなに美しい人だったら、男たちはそら夢中になるだろう。

彼女は出会った角を曲がり、俺の前を悠然と歩いている。そんな華麗に歩く後姿からなかなか目を離すことができない。特にスカートの中から伸びるキレイで染み一つない真っ白な太ももから。自分も彼女の歩幅に合わせながら、マジマジとした視線で見つめていると、突然彼女が歩みを止めて、後ろを振り返った。

俺もつい足を止めてしまい、その場で立ち竦んでしまう。

「ねえ、キミ」

清涼で涼しげな印象を受ける声がかかる。

人によつては少し冷たいと感じる人もいるかもしれないが、俺にしてみれば“弥富朱音”という手の届かない至高の華というイメージにピッタリの声だ。

「ねえ、キミってば」

ん？ イメージ通りの美声に少し考えてしまったが、誰かに声を掛けているのか。こんな美人さんに話しかけられて無視するなんて、けしからんヤツだな。

「あなた、聞こえてないの？」

まだ無視してんのか……そこまでいったらもはや焦らしプレイだ

る。俺なら舞い上がるくらいテンションが上がるのに。

「自分が話しかけられてるって気づいてないの？　そこにボーっと突っ立っているキミよ、キミ」

なんか、弥富さんがこっちを指さしてくるぞ。俺の後ろにいるのか、仕方がないから退いてやるか。

俺は立っていた場所から移動して、道の端に寄った。

ツー。

アレ？　弥富さんの指がこっちを追いかけてくる。なんでだ？

「キミ……それ、わざとやってる訳じゃないよね？」

何か俺を見ながら話しかけてくるぞ。………って、まさか俺！

？　とっ、とりあえず間違いかもしれないから聞いてみるか。

「あの、まさかキミって俺のことですか？」

「そうそう。話しかけても無視されっぱなしだからどうしたもんかと思っっちゃったわ」

どうやら本当に、道路の壁にナメクジのように寄り添っている俺に話しかけていたらしい。でも、何でだ？　別に彼女とは知り合いないし、もちろん友達でもないんだが。

……もしかして、今までずっと見つめていたことがバレてて注意するために話しかけたとか！？　しまった！！　なんという失態を犯してしまったんだ。このままじゃあ、下手するとクラスだけじゃなくて、学校全体から白い目で見られることになるぞ！　ここは謝って許してもらうしかない！！

「すっ、すみませんでした。もうあなた様には近づかないし、視界にもいれないように気をつけるので、ここは許してください！！」

思いつきり頭を下げる。最悪、土下座してもいいとすら思う。

「何を言ってるのか全然分からないけど、たぶんキミが思ってるよなことじゃないから気にしなくていいわよ？」

えっ、そうなの？　良かったああーこれからの高校生活がさらな

る暗黒時代に突入するかと思っただぜ。

でも、そうじゃなかったら何で俺なんかに話しかけたんだ？ 自分の言うのもなんだが、クラスの偽アイドルである香澄恋歌かすみれんかとは違って、全校男子生徒の中で真正正銘のアイドルと化している弥富朱音さんに話しかけられるような男じゃないと思うんだが俺は。

「うーん、突然聞くんだけどさあ、キミって今、部活とかに入ってる？」

本当に突然だ。まったく脈絡すらもない。理由は分からないが、別に答えられない質問ではない。

「いえ、入ってませんが、それがどうかしましたか？」

それを聞いた途端、目の前にいる彼女は一瞬だけ笑みを作ったかと思うと、

「それじゃあ、今日の放課後に部室棟にある110号室に来てくれる？」

「えっ……なぜですか？」

「質問に質問で返さないでね。言っておくけど、来なかったらさっきまで私のことエッチな目で見てたこと、学校中に言いふらすわよ？」

「ブッ!!」

言われたことが信じられず、吹き出してしまった。

ってか、なんで俺が謝ったのか理解してるじゃありませんか、弥富朱音さんよ。そんなこと言われたら後が怖くて行くしかないじゃないですか……。

「わっ、わかりました。謹んで行かせていただきます……ですから学校に言いふらすことだけは、ご勘弁を」

「うんっ、よろしい。最後のはキミが本当に来たら考えるわ。それじゃあ放課後に部室で待ってるわね」

それだけを言い残し、彼女は走って行った。

未だに壁際で突っ立ったまま動けない俺を放置して。

……どうして、こうなった。こうなってしまったのは、彼女の言う

とおり放課後会いに行くしかないだろう。

ようやくフリーズから立ち直った俺はいつものセリフを呟いた。

「ああ……鬱だ」

ポツリと呟いた俺の声は、誰にも聞こえないまま、その場で巻き起こった風に吹かれてかき消されてしまった。

結局何なんですか？（前書き）

やっぱり一人称って難しいです。

結局何なんですか？

ついに、ついに、この時が訪れてしまった。

授業もすべてが終わり、これから弥富朱音やとみあかねさんの待つ部室に行くことになると思うと、鉄球が付いたように足が重くなる。

今日も以前と変わらない“ぼっち生活”を送っていたのだが、時折聞こえてくるヒソヒソ声も、悪口のような言葉も、まったく言っていないほど耳に入らない。この後に待ち受けるものがなければ、ある意味、普段よりも落ち着いていた平穏だったのかもしれない。

そう感じてしまうほど、俺の心は不安でいっぱいだった。

本当に彼女は何の目的があって、自分なんて男を誘ったのか。おそらく彼女が誘いを掛ければ、大半の生徒がホイホイと応じるだろう。

これほどの生徒がいる中、なぜ俺に声を掛けて部室に招待したのか、一日中考えても答えはでなかった。

このような場合、普通なら怪しんで行かないところなのだが……。

今回、俺は逃げ道を潰されているのだ。

弱冠、脅迫めいたやり方で。

俺は、仕方なく教科書などの荷物をカバンに纏まとめると、いつもより暗いオーラを撒き散らしながら教室を後にする。そして、そのままの足取りで指定された部室棟110号室へと向かっていった。

後ろから、クラスメイトが再び何かを囁ささやきあっているような声もガン無視して……。

扉の上に貼り付けられたプレートには、書式も分からないような字体で、『CLUB ROOM 110』と書かれている。

ドアノブに手を掛けて、大きく息を吸う。

ここに入ったら、引き返すことはできないだろう。万全の覚悟を

持っていないと、どうなるか分かったものではない。

限界まで息を吸ったところで、今まで溜め^たに溜め^たた酸素を一気に吐き出す。

よしっ！ 入るか！！

心の中で覚悟を決め、ついに扉を開けた。

「こんにちは、ようやく来たわね」

花の咲くような笑顔で挨拶された。やばい……彼女の顔を見ただけで、覚悟が折れてしまいそうなんだが……。

改めて見ると、やはり綺麗な人だと思う。二人きりしかいない部屋の中にいるだけで、意識したくもないのに顔が少し赤くなってしまうのが分かる。手で顔を押さえる訳にもいかなないので、顔の火照りに気づかないでいてくれることを祈るばかりだ。

「さあ、まずはその椅子に座ってちょうだい」

細く繊細な指が部屋の中心に置かれている丸テーブルへと向けられている。結局何をしたいのかは分からないが、とりあえず言われた通りにテーブルとセットになっている椅子に腰掛ける。

すると、弥富さんも俺と対面になるように椅子に座った。

「それじゃあまず、お互いの自己紹介といきましょうか。たぶん知っていると思うけど、私の名前は弥富朱音よ」

ほぼ初対面の俺に『私のこと知ってると思うけど』ってどれだけ自分に自信持ってたんだ？ まあ、結局知っているから、自信過剰でも何でもないんだが。

「今度はキミの番よ？ ネクタイの色が緑だから、今年入学してきた新入生よね？」

弥富さんはリボンの色が赤いから二年生ですよね？

……なんて、気軽に聞き返せる訳ねえだろうが。

こちらら学校一有名な人を目の前にして、いっぱいいっぱいなんだよ。なんて言えばいいのかわかんないが、お互いの見た目と雰囲気の違いを感じてるんだ。たぶん他の男が同じ状況に放り込まれても同じことを思うはず。

「はい。一年生の上木幸司かみきこうじです」
仕方なく無難に返答してみる。

「キミ……うーん、もう名前も聞いたから幸司くんが良いよね？
幸司くんをここに呼んだのは他でもありません」

「うおおオオオオオオオオオオ！！」

学校一の美人さんにつ……名前、名前で呼ばれた！ なつ、なんてこった。友達の一人もできないヲタクなキモ男おなのに、そんな嬉しいことがあつていいのか！？

……あつ、自分でキモ男おって言っちゃった。

自己嫌悪おちいに陥り、舞い上がっていたテンションが急降下していく。
「幸司くん、ちゃんと話聞いている？」

「はっ、はい。大丈夫です、ちゃんと聞きます」

さすがに顔に出しすぎたのか、違うことを考えていたのがバレてしまったみたいだ。俺は弥富さんの言葉へと耳を傾け、聞く体勢を整える。

「ちゃんと聞きますって、今まで聞いてなかったってことよね？」

「しまったああああああ！！」

「すいません！ 言葉の綾あやってやつです！！ ちゃんと聞いてます
！！！！」

「そう？ なら良いんだけど」

なんとか無事に乗り切ったみたいだ。何か、怪しむような冷たい視線がこちらに向いているが、気にしたら負けだ。

「話が中々進まないから、先にあなたをここに呼んだ理由から言うわね？」

「ついに来た……。俺がここに呼ばれた理由。」

大事な話なのか、神妙な顔をする弥富さんの真面目な雰囲気にも飲まれ、身体が硬くなったように動かなくなる。さらに緊張のせいか、ゴクリと生唾を飲み込んでしまう。

「……それはね？」

「……それは？」

「幸司くんに恋愛の手助けをしてほしいの」

一瞬、俺は何を言われたか理解が出来なかった。弥富朱音さんが？ 誰もが知る有名なあの弥富朱音さんが？ そんな人に好きな人がいるなんて……。

「嘘おおおおおおお！？」

思わず大絶叫。たぶん、部室棟のすべてに届くのではないかと思うほど、悲鳴にも似た驚愕の音が響き渡る。

「ちよつと……五月蠅い！！」

俺の声に両手で耳を押さえながら、文句を言ってくる。

「だって、学校のアイドルである弥富さんですよ！？ そんな人に好きな男がいるなんて、誰だって叫びたくなくなりますよ！！」

「えっ？」

俺の言葉を聞いて、理解ができないかのような不思議な表情で、首をコテンつと傾げる。しかし、だんだんと俺が言った言葉の意味を理解したのか、弥富さんの綺麗な顔が朱色に染まっていく。

「ちっ、違っつて！ 私の恋愛じゃなくて、他の生徒の恋愛を手伝ってほしいってこと！！」

「えっ？」

今度は、俺が首を傾げる番だった。

「おほんっ、つまりね？ 自分で言うのもなんだけど、私って顔も良いし、スタイルも良い。ついでに性格も良くて、男女関係なく好かれる立場なのよ」

普通なら「何を言ってるんだこの女」と思つかもしれないが、弥富さんだったら納得してしまうのが驚きだ。他の女子がこんなこと言ったら、鼻で笑ってしまうだろう。

「でね、よく女の子が私のところに恋愛相談に来る訳。好きな人がいるんですけど、どうしたらいいですか？ って相談ぐらいなら構わないのだけど、一番困るのが告白できるように手伝ってくださいって頼み事なのよ」

女子の間ではそんなことがあるのか……。まあ、告白の手伝いっ

てのは珍しいかもしれないが、弥富さんほど人望があれば、ないこともないのだろうさ。

ん？ でもそれが、おれと何の関係があるんだ？

「はあ……弥富さんも大変そうですね。あまり俺には関係なさそうな話ですが……」

「何言ってるの？ 最初にお願ひした通り、幸司くんはその女の子たちの手助けをしてほしいんだけど」

えっ、この先輩ったら何言っちゃっててくれたの？ まだ女の子と付き合ったこともない俺がそんなことできる訳ないじゃないですか。

「そもそも何で俺なんですか？ 弥富さんほどの人なら、他に頼むことができる人なんていくらでもいますよね？ 何か俺じゃないといけないような理由があるんですか？」

「えっ、別に理由なんてないけど？」

「はっ??？」

ちよつと待て、落ち着こうか俺。弥富さんは何を言ったんだ。理由がない？ いやっ、そんなことはないはず……。

って、落ち着けるかああアアアアアアアアアア！！

「何で！？ 何か理由がなきゃ会った事も話した事もない俺なんかに頼むことじゃないでしょうが！」

興奮のあまり、早口で息継ぎもしないまま言い切った。

そんな俺を見ても、弥富さんは落ち着いて返答する。

「本当に理由なんてないのよ。しいて言えば、朝歩きながら悩んだ時に、たまたま幸司くんが目に入ったからかな。私だけ他人のことで悩むのもアレだったから、あの人も巻き込んだらおう！ みたいな？」

「そんな適当な……ってか、アレって言われても分からないんですけど」

「ん〜と、面倒とかム力つくって意味？」

「人から相談受けといて、面倒とか言わないでくださいよ」

「あつ、言い忘れてたけど、断ったら私をエッチな目で見てたこと、学校中に言いふらすからね。元々、この部屋に幸司くんが来たら言いふらすかどうかは考えるって言っただけだし、断られたら私が困るから……別にいいよね？」

すでに、目の前に座る人に対して溜め息しか出てこない。周りの噂を聞く限りでは、みんなに人気のある女性や尊敬する先輩という話だった。最初はその見てくれから俺も勘違いしていたが、面と向かって話したら分かる。

この人　　すごく適当で、面倒で、自分勝手な人だ！！

正直、詐欺めくらにでもあった気分である。だが、まだ俺は救われた方だろう。あくまでクラスメイトの話を盗み聞きしただけで、最初からあまり彼女のことを知らなかったのだから。

この性格が学校で噂になっていないのは、おそらく意図的に周りに隠しているからだろう。これほど適当な性格の人なら、生徒や先生から信頼などされるはずがないし、尊敬もされないに決まっている。

結局、俺はえらい貧乏クジを引かされただけみたいだ。

弥富朱音やとみあかねの本当の性格を知れて嬉しい？

学校一のアイドルと呼ばれるほどの美女とお話ができて楽しい？

アホか。

こんな逃げられもしない、面倒なことを押し付けられてそんな気持ちになる訳ないだろうが。

ここはやっぱり、いつものセリフを言っておかなければならないだろう。

「ああ……鬱だ」

そう呟いた瞬間、部室の扉がガチャリと開いた。

やっぱり逃げられないんですかね？

「失礼しま〜す！」

明るい声で扉を開け放った女子を見て、俺は驚きを隠せなかった。さり気なくクルクルとウエーブした、目立つ茶色の髪。高校生のくせにお前どれだけ気合入れてんの？ と、思わざるを得ない化粧つけ。

俺の大嫌いな人と言っても過言ではない女。その頂点に君臨する

香澄恋歌の姿がそこにはあった。

アチラさんも最初の元気な挨拶とは打って変わり、俺を見てから目を大きく開いて驚いている。

「どっ、どうして上木がこんなところにいのよ!？」

それは俺のセリフだつちゅーの! ってか、さっきまで目の前に座る弥富さんに相当心を折られてるんだ、これ以上俺にダメージを与えないでくれ!!

「……すまん」

とりあえず、無難に謝罪してみる。

「はっ、はあ？ 何、謝つてんの？ アタシは、上木がどうしてここににいるのかって聞いてんだけど」

そんなもん俺にも分かんねえよ……。むしろ、ここに居たくて居るんじゃないの。そもそもお前がここに来るって分かってたら、弥富さんに言われても無視してたわい!!

ん？ そういえばコイツは俺のことキモ男おって呼ばないんだな。

クラスの女子たちはみんな俺のことキモ男おって蔑称くせうで呼んでるのに。「まあまあ、幸司くんも香澄さんに関係があるから、私がここに呼びつけたのよ。まずは席に着いて、落ち着いて話をしましょ？」

弥富さんに言われたからか、それまで虫を見るような目で俺に視線を向けていたが、渋々と空いている椅子を引いて腰を下ろした。それ以降、チラチラと俺を睨みつけてはくるが、特に何も文句は言

ってこなかった。

「さて、香澄さん。先日私に相談した通り、あなたには好きな人がいて、その告白を手伝ってほしいって話で良かったよね？」

「ちょ、ちょっと、弥富先輩！？ここに上木がいるのに、何でバラしてるんですか！！」

それにしても、弥富さんと香澄の間で温度差あるなあ。まあ、秘密を暴露されてるから香澄が一人で興奮するにも分かるんだが。

「それにはちゃんとした理由があるから大丈夫」

「全然大丈夫じゃないですよ！ どう考えても上木が関係してくるなんて考えられません！ 同じクラスだから分かるんですけど、上木が“優輝くん”と知り合いなんてありえないし！！……あつ」
へえ、お前、“優輝”ってヤツが好きなのか。香澄が口を滑らしたとはいえ、良いネタをゲットしたな。俺がクラスでこの噂流したら、コイツも困るだろうぜ、クツクツク……。

ふっ……。しかし、口を滑らした相手が俺で良かったな。俺は人の心の痛みが分かる男だから、さすがに他人が嫌だと思うことはしねえよ。こんな人としてできて俺を褒めてやりたいぜ。

……。まあ、その前に噂を流せる友達がいらないんだから、意味ねえんだが。

別に悪いことする訳じゃないのに、なんだろう？ 胸に込み上げようなこの悲しさは。

「ううう。ちょっと上木！ 今のは聞かなかったことにしなさい！！」

「わっ、分かった」

うおお、怖いよこの人。嫌いな女だが、顔だけはいいからな。睨まれた時なんて、少しチビリそうだったぜ……。

その前に香澄、自分の失態の相手に黙ってもらったのに、命令口調ってどうなの？ お前も俺のこと嫌いなんだろうが、願ひする時くらい誠意を見せるよ。

……。ん？ もしかして、俺の名前を知らないなんてことはないよ

な？ 待てっ、考えるな！ それ以上掘り下げたら俺の心がもたん
！！

「最終的には、幸司くんには香澄さんの恋愛を手伝ってもらうんだ
から、ここでバテてもいいと思うんだけどね？ むしろ、早くて助
かる」

「えっ？」

「えっ？」

あっ、被^{かぶ}つちやっただ……。

「「えーーーーー！！？」」

何言ってるの、この人！ 俺が香澄の恋愛を助ける！？ さすが
に心の広い俺でも、それは無理だつて！！

「幸司くんまで何で驚いてるの？ さつき、キミに手伝ってもらっ
つて言ったじゃん。さすがにもう忘れたとか言わないよね？」

「それは聞きましたが、俺はまだやるなんて返事してないですよ！
！」

「別に断ってもいいのよ？ そしたら、キミの学校での立場がど
うなるか分からないけどねえ。 ついでに、香澄さんの好きな人
の名前も聞いちゃったから、クラスでの評判も墜ちちゃうかも」

こっ、この人、最っ悪だああああ！！

本当に学校中を巻き込んで、俺を嫌われ者にしようとしてやがる
！ クラスですでに嫌われてるので、今さらですがね！！

断る気力すら奪われ、ガックリと肩を落とす。すでに心は諦めモ
ードだ。

もうこの人には逆らえない、と。

「ふっふっん。その様子じゃあOKしてくれたみたいだね。うん、
良かった良かった」

別に了解した訳じゃないですけどね。ただ、あなたのせいで逃げ切れなくなっただけですから。

すると、うな垂れている俺の隣から、バンツと机を叩く大きな音が聞こえた。

「アタシはまだ納得してないです！ どうして上木を手伝わせるのか理由を教えてください！」

そうか！ まだ香澄という希望が残ってたんだ！

少しだけ萎れていた気力が回復する。

結局のところ、コイツが了承しなければ俺も恋愛の手伝いをする必要がなくなってくるじゃないか。

頑張れ、香澄！！ 今だけは、お前を応援してやる。

しかし、そんな継るような淡い期待は、すぐに目の前の先輩に砕かれた。

「香澄さん、よく考えてみてね」

急に引き締まるような雰囲気、香澄は気おされたようにして、たじろぐ。

「私は二年生なのよ？ 最初は、先輩として恋愛相談を受けてアドバースなんかもしたけど、告白となると話が変わってくるわ。あなたの好きな優輝ちゃんと面識なんてないし、そもそも話、優輝くんって一年生でしょ？ 告白を手伝うってことは、絶対にどこかで私が優輝ちゃんと関わらないといけないし、その人と直接話さないにしても、どこかで噂が立つのは目に見えてるわ。そうすると、あの弥とみあかね富朱音は、優輝という男性に気があるって噂になって、逆にあなたが告白し辛くなっちゃうのよ」

クツ……さすがは今まで適当な性格を隠し続けてきた猛者。こと噂に関しては、弥富さんの右に出る者などいないのではないか。さすがに先読みし過ぎな気もするが、彼女の口ぶりからすると、それが事実なのかとすら思ってしまう。

隣に座っている香澄を覗き見ると、彼女もまた、何とも言えない表情で唇を強く結んでいた。しかし、今だ納得しているような顔で

はない。

「弥富先輩が直接手伝えないことは分かりましたが、何でこの男に手を貸してもらわなければならぬのか分かりません」

最初とは違い、覇気が少なくなっているように感じる。

そら、そうだろ。クラスでは可愛いと人気がある香澄であっても、学校中の誰もが認める弥富朱音にして、女として『私には勝てない』と言われたようなもんだからな。それを香澄も心で認めてしまったのが、また辛いんだろうな。香澄ってプライドがすげー高そうだし。はああ、この女のこと嫌いなはずなのに、心境だけは何故か理解できちまう。これはアレか？ 嫌いな分だけ香澄を意識しているから、逆にコイツのことが分かるようになってしまったってヤツだ。……皮肉なもんだぜ。

「香澄さんが、上木幸司という男性をどう捉えているかは知らないけど、これだけ付き合えば短い私でも彼が良い人なのは分かるよ？

たまに口が悪い時があるけど……」

その言葉は香澄だけでなく、俺までもフリーズさせるには充分だった。

「まあ、嫌いな人のことを教えても理解なんてできないから、この理由は置いておくとして、私が幸司くんを推薦する。それだけじゃ納得できないかな？ これでも今まで相談を受けてきた身なんだから、香澄さんには成功してもらいたいって思ってるのよ」

それを聞いて、香澄はシュンッと肩を落とし顔を伏せる。

納得がいかなかったか？ と俺も含め、弥富さんまで黙って香澄を見つめている。

すると突然、思い切り顔を上げ、決意を胸にしたように吼えた。

「わかりました！！ ここは弥富先輩を信じて、この男に手伝ってもらおうと思います！！」

うそ〜ん……。

目前にはしたり顔でうんうんと頷いてる人がいるし、隣では何かスポーツ漫画のように熱く燃えている人もいる。

何か、俺だけ置いてきぼりを食らっている感が否めないんだが。
まあそれでも結局、香澄が納得してしまったことで、俺が手伝わ
ないといけないのは変わらないみたいだが……。

やはり毎度お馴染みのセリフを言わなくちゃ耐えられそうにない。
「ああ……鬱だ」

この日から、俺の高校生活は激変したと言っても良かった。

あの男で間違いないですか？

香澄^{かすみ}の告白に協力すると決まった次の日。

午前の授業が終わった昼休み、生徒たちは教室で弁当を食べたり、仲の良い友人らで集まって遊んだりしている。

そんな日常的な光景が繰り広げられている中、俺と香澄の二人は人気がない廊下の端にあるスペースへと身を寄せていた。そして、そこの壁から優輝くんがいるであろうクラスを覗き込んでいた。

「はああー、なんで俺がこんなことを……」

「はあ？ 何言ってるのアンタ？ 私だってアンタに頼りたくないっつての」

どうして俺は、こんなに口が悪くて、大嫌いな女の手伝いなんかしなくちゃならないんだ。これも全部、朱音^{あかね}先輩のせいだ。ほぼ脅迫に近かったとはいえ、やっぱり早まった気がしてならない。

それに、先輩の名前の呼び方についてもそうだ！

あの時の帰り際、先輩から「これからは幸司くんにも協力してもらおうし、**“弥富さん”**なんて他人行儀な呼び方じゃなくて、**“朱音”**って呼んでくれても良いのよ？」なんてことを言われた。普通、女の子の名前を呼んで良いと言われたら狂喜乱舞するのだが、流石に先輩だし、学校一の美女ということもあり、朱音先輩と呼ぶことで双方納得した。あの人、絶対に自分のことを名前で呼びづらいことを気づいてて言ってくるもんだから、余計にたちが悪いんだよな。最後なんて「幸司くん、私を名前で呼んでくれないの？」なんて目をウルウルさせてくるんだもん。

んなことされたら、断れる訳ねえっつーの！！。

隣に座ってた香澄なんて、信頼している人を泣かせたって言うって

激怒しやがるし。

誰だよ……女が三人集まって姦かしましいなんて言ったヤツ。二人でも充分姦かしましいっての。

そんなことを思い出していた時、注視していた教室が開かれ、一人の男が出てきた。

「あつ、優輝くん」

険悪な表情から打って変わり、ポワンとした目で先を見つめる香澄。

「ん？ アイツが香澄のお目当ての男なのか？」

再び廊下の角から除き見ると、俺の目線の先にはパツとしない眼鏡を掛けた男がいた。今は後ろから付いてきた友人らしきヤツラと仲良くおしゃべりをしている。まったく目立たない風貌で、高校指定の制服もキツチリと着こなすような真面目そうな男だ。

「ちよつと、優輝くんのことアイツ呼びわりしないでくれる。……知り合いでもないくせに、馴れ馴れしく呼びすぎなのよ！」

イテッ！　なんで頭まで叩きやがるんだよこの女！　アイツって呼んだくらいで殴られなきゃならねえなんて面倒くさすぎるぞ！！　クソッ、文句でも言ってやりたいが、コイツの女子への影響力ってハンパないからな。下手すると、明日から俺のクラスでの居場所がなくなっちまう！！

……あつ、もうなくなってるか。

けど、謝らなかつたらもっと酷い扱い受けそうだしなあ……はあああ、憂鬱ゆううつだ。

「……悪かったよ。それでどうするんだ？　得意じゃないけど、俺が話しかけてここに連れてこればいいのか？」

「アンタ、バカじゃないの！？　ここに連れてきたら結局私と話すことになるじゃない。それが恥ずかしいから、上木の力なんて借りてるってのに……まったく」

そりゃー悪うござんしたね。ってか、今までずっと思ってたが、お前ってこんなに恋愛に奥手だったのか？　見た目だけだったら、

好きな男にガツガツ詰め寄りそうに見えるんだが。

「ちよつと、私の話ちゃんと聞いてんの？ 弥富先輩がアンタを信用するって言うから少しは期待してたのに。これじゃあ、最初から不安を覚えてくるわ」

「……俺に何の期待をしてんだよ。そもそもお前のせいで俺はクラスで嫌われてるんだからな？ 正直に言っちゃうけど、俺はお前のことが嫌いだからやる気なんてでない」

当然だろ？ さすがに暴力とかイジメはなかったが、クラスで孤立する原因を作ったのはこの女なんだからな。

むしろ、そんな俺に期待してるなんて吐かしゃがるんだから、その凶々しさにだけは尊敬の念すら覚えるわ！

「グツ……それは悪かったと思ってるし、謝るわよ。アタシだってあの会話だけでアンタがこんだけ嫌われるなんて考えてなかったんだから……」

「今まで寂しく空白だった高校生活を、謝罪の一言で許すと思ってるのか？ 今の俺が掲げる座右の銘がどうなってるか教えてやるよ。その名も『孤独なロンリーウルフ』だ」

確かハブられたのが入学してからすぐだったから、今日までいたい二ヶ月間ぐらいか？ その間、寂しさと哀愁を漂わせた背中をクラスで晒してきたんだ。

今まで散々ハブられてきた恨みを『ごめんなさい』の一言で片付けられたら溜まったもんじゃねえっーの。

あつ……コイツ『ごめんなさい』なんて殊勝な言葉言つてねえわ。「そつ、それじゃあ、優輝くんとこの恋が実ったら、アンタがクラスでキモヲタって呼ばれないように良い噂流してあげるって」

あつ、それはちよつと、いや、かなり嬉しいかも。コイツの影響力は俺の身をもって証明済みだしな。かなり期待が持てそうだし、自分一人で頑張る必要もなくなって頼りにもなりそうだ。

と、難しい顔をしながら告白を手伝ってやるうかと考え込んでいた時、香澄は何を勘違いしたのか不満な顔して、

「むづう〜、アンタも男でしょ？ 私みたいに可愛い女の子が謝ったんだから、男らしく許すのは当然なんじゃないの？」

えっ、何言ってるのコイツ。一瞬だけ手伝ってやるのかなあ〜なんて考えた自分がバカみたいだ。自分勝手すぎるにもほどがあるだろ。これがゆとり社会に毒された子供世代か……別に同情する気なんてさらさらないが、少しだけ哀れに思えてくるよ。

それよりも、自分が可愛いとか思ってるなら勇気だして優輝くんとやらの告白しろよ。

「……もう面倒だから、それについては何も言わねえよ。お前と悶着したって後が怖そうだからな。それで、ここから覗き見てどうすんだ？ 結局アイツと話をする機会がなかったら先に進まないと思っぞぞ？」

「それをアンタがどうにかするのよ。まずは優輝くんに好きな女の子がいるのか聞いてきてくんない？ 後は好きな女の子のタイプとか、女の子のどんな仕草が好きとか、女の子にどんなことされたいかとか、って最後のは……キヤツ！」

両手を頬に当て、赤面しながらイヤンイヤンと顔を横に振っている。

オイ……聞いてないぞ、そんなこと。話したこともない男にいきなりそんなこと聞いたら、ドン引きレベルがマツ八なんだが。そもそも残りの三つは、彼女がいない場合にしか聞けないだろうが。

ってかコイツ、俺が初対面のヤツに自分から話しかけることが苦手って知らないんだよな。むちゃ振りもいいところなんだが……って！？

「なあ、香澄？」

頭の中でお花畑を思い浮かべているであろう人に向かって問いかける。

「……なによ？」

すると、妄想の世界から帰還した香澄が、邪魔されて不機嫌な声を上げた。

しかし、ここは言わなければならぬだろう。なぜなら、
「俺らが無駄に駄弁たべつてる間に、お目当ての人がいなくなつたんだ
が」

「……………ハアア!？」

慌てたように、先ほどまで優輝がいたであろう場所を覗き見る。
やはり俺が言ったように、そこに優輝の姿はなかったのだろう。
ワナワナと肩を震わせている。

「アンタ、何やってんのよ! 上木のせいで、優輝くんどこか行つ
ちやつたじゃない!」

ガバつと勢いよく振り返り、怒鳴る。

「知るかよ! ってか、俺のせいって何だよ! お前がさつさと話
しかけに行かないからこうなつたんだろうが!」

「うっ、うるさい、うるさい、うるさーい!! 八ブられてるくせ
に、八ブられてるくせに!!」

「今、俺八ブられてるの関係ないからね!？」

「初っ端から躓つまずいちゃつたじゃないの! どうしてくれんのよ!？」

「初っ端つて……まだお前はスタートラインにも立つてないだろう
が! 躓つまずいたつて、話しかけることに成功してから言えや!」

「ぬっうううう!!」

お互いに責任を押し付けあっていたその時、

キーン、コーン、カーン、コーン。

つと、昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴り響いた。

よくよく角から周りを見回してみれば、あまり廊下に人がいない
ことが分かる。おそらく、次の授業の準備のためにそれぞれの教室
に戻ってしまったのだろう。もしかしたら、優輝くんとやらもその
例に漏れず、教室に戻つたのかもしれない。

二人はチャイムの音を聞いて、落ち着きを取り戻した。

「……………はあー。とりあえずアンタ、今日の放課後になつたら部室に

顔出しなさいよ？ このままじゃあ先に進みそうもないから、これからの作戦を練らなくちゃ」

……作戦って。告白ってそんなに大層なもの必要だったっけ？

「……分かったよ。それじゃあ、今はもう教室に戻っていいよな？」
「勝手に戻りなさいよ、フンツ！」

そうして、俺は一人で自分の教室へと足を向けた。

別に悪いことしてる訳じゃないが、俺が香澄と一緒にいたなんてことをクラスの連中に知られたら、速攻噂になるだろうさ。たぶん、そんなこと香澄は望んでないだろうし、俺もアイツと仲がいいなんて思われたくない。

俺はいつものように、トボトボとした足取りで歩いていく。

あの男で間違いないですか？（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
誤字・脱字や、おかしい表現があれば教えていただけると幸いです。

そんなにイジらないでくれますか？（前書き）

途中で力尽き、中途半端で終わってしまった……もしかしたら、変な文章になってるところもあるかもしれせん。

あれば指摘していただけると嬉しいです。

そんなにイジらないでくれますか？

その日の放課後。

俺は香澄と朱音先輩がいるであろう部室へと向かっている。

もちろん、今も同じクラスである香澄と肩を並べて歩くなんて愚行はしていない。香澄はホームルームが終わったら、足早に教室を出て行ってしまった。去り際に俺を睨んだように一瞥いちぺつしてきたが、たぶん……絶対に来いよ的な視線だったと思う。うんっ、間違いないな。理由もなく、ただ睨まれただけだったら、正直勘弁してほしい。

ここ県立鷺峰高校は、他の県立高校と違った特色がある。その特色とは、部活もしくは同好会専用の部室棟が敷地内に存在することである。鷺峰高校の校訓として、“文武両道”という言葉がある。たぶん、全国どこの高校の校訓を見てもありそうな謳い文句であるが、鷺峰高校は違う。

本当の意味で、“文武両道”という言葉をそのまま体言しているのだ。

普通の高校の生徒手帳を見渡せば、顧問や部員が五人以上という規約があるだろう。しかし、この鷺峰高校において、そのような規約はない。

さすがに部活にカテゴライズされるには顧問が必須のようだが、同好会はそのかぎりではないのだ。人数制限もなく一人でも設立が可能で、しかもあり余っている部室まで貸与されという高待遇ぶり。月に一度の定例報告会への参加と、活動報告の提出さえ満たせば、結構簡単に受理されるらしい。

お陰で、有名な運動系の部活からマイナーな文科系の同好会まで、この高校にはたくさん存在している。

その中で、朱音先輩も何かしらの申請を行い、同好会を設立した

のだろう。他に部員がいるのかは分からないが、教師にも信頼されている朱音先輩ならば、同好会申請が通るのも簡単だったろう。もちろん、高校側から部活を推奨されているというだけで、強制的に入部しろと言われている訳ではない。なので、当然ながら俺みたいはどこにも所属していない生徒なんかも居る訳だ。

再び訪れた『CLUB ROOM 110』と書かれた部室。

この向こうには、すでに厄介な先輩と嫌いなクラスメイトが顔を合わせているだろう。そう考えるだけで、部屋に入りたくないという衝動に駆られるが、約束は約束だ。俺は折れかかる心を何とか奮い立たせて扉を開け放つ。

「ちよつと、遅いんだけど。女の子を待たせるなんてどういう神経してんの？」

……マズイ。もう心が折れちゃいそうなんだが。

「ちよつと友達に用があつたんでな、少し遅れたわ」

「ハア？ アンタに友達がいらないことぐらい、アタシに分からないとでも思つたの？ 言い訳するならもつとマシなのにしてよ。つていつか、遅れたことに言い訳するなんて、もう最悪」

自分でも無理があるとは思つけど、咄嗟に口から出ちゃつたんだから仕方ないじゃん！？

お前に言われなくても、寂しい現実はずっかり受け止めてるつての！

「わっ、悪かつた。つい強がっちゃいました、ハイ」

「フンツ。今回は特別に許してあげるけど、今後そんな分かりやすい嘘が私に通じるなんて思わないことね」

「しよつ、承知しました」

俺と香澄の間で微妙な雰囲気 flowed。すると、今まで大人しく椅子に座っていた朱音先輩が口を挟む。

「幸司くんって友達いないんだ？ 最初は暗そうな人に見えたけど、

話してみると以外に面白い子なんだけどね」

そのセリフに香澄が信じられないといった顔で抗議する。

「何言ってるんですか、弥富先輩！ コイツってば、教室で一人寂しくゲームなんかやってるから、みんなにキモヲタって呼ばれて敬遠されてるんですよ！？ まっ、まあ、誰かのせいでここまで酷い扱いを受けることになったのは間違いないですけど……」

オイ……しゃべるのが苦手だからって一人でゲームしてたのは俺の落ち度だと思うが、ダサいから嫌われてるってさすがに言いすぎじゃね？ 言いよどんでるが、俺がキモヲタっていうレッテルを貼られる切っ掛けを初っ端に作ったのは香澄、お前だからね？

「ふん。幸司くんって今流行りのヲタクくんなの？」

いいえ、違います。アニメやゲームが好きで、どこにでもいる健全な高校生です。

そう弁明しようとして口を開けかけたが、

「クラスの全員に認知されているくらいです」

香澄よ、何故お前が答えるし。

「別に私はキモイって思わないけどなあ。それにゲームが好きっていうのも一つの個性じゃない？」

朱音先輩よ……あなたは女神か何かですか？ 高校に入学してから、初めて俺の趣味を認めてくれたぞ。いやあ、さすがは学校一人気のある女性。香澄なんかとは比べ物にならないくらいの心の広さだぜ。

香澄なんて自分の意見に賛同してもらえらると思ってたみたいで、朱音先輩に否定されて悔しそうな顔してるし。ハッハッハー、ざまあみる……！

「でも、世間的には嫌われると思うけどね」

朱音先輩 いいいいいい

……！！

一瞬でも朱音先輩のことを良い人なんて思い、浮かれてしまった

自分を殴りたい。結局は持ち上げて落とされただけだった。

隣では、「やっぱりそうよね、うんうん」、なんて頷いてるヤツもいるし。

「それでも幸司くんって、そんな世間体を紙くずのように無視してゲームをやり続けるんだから凄いよね。これが男の子ってヤツかな？ 自分の進む道は自分で決める的な」

……それは俺のことを褒めてんですか？

それ、捉えようによっては、ただの世間体という名の常識が分かっているバカって言うてるのと同義ですよ？ ……あまり否定できないのが心苦しいですけど。

香澄が可哀想な目で俺を見てくる。その目は何度も向けられたことあるが、いつまで経っても慣れないからやめてくれ。

「っと、こんな無駄話している暇なかつたね。さっ、幸司くんもそんなところに突っ立ってないで、早く椅子に座って」

「……ふあい」

ヤバイ……学校にいるってだけでもテンション下がるのに、部屋に来ただけで、なけなしの気力まで奪われてしまった。

力尽きたように、ドカツと勧められた椅子に腰を落とす。

「よし、それじゃあ話を始めるわね？」

香澄は「ハ〜イ」と元気良く返事し、俺は壊れたカラクリ人形のように首を縦に振る。

「幸司くんが来る前に、香澄さんから今日の昼休みの出来事を聞いたわ。そこで幸司くんは優輝くんって子を見て、どんなこと思った？」

「どんなって……あんまりパツとしない真面目そうな男って印象ですかね。香澄が好きだって言うもんだから、もっと今どきなかつこいい男を想像してましたよ」

すると、また香澄が^{まなこ}目を吊り上げる。

「ちよつと上木のくせに『香澄さん』……えっ？」

「また言い合いを始めると話が全然進まないから、今は大人しくし

てね？」

「はっ、はい……」

さすがに朱音先輩も、一々話しが途切れるのが嫌だったみたいだ。顔は笑顔だが、何故か文句を言わせないような迫力を感じる。

そして俺のほうへと向き直り、先ほどとは打って変わったかのような神妙な顔をしたかと思うと、テーブルの上で手を組む。

それ……ゲンドウさんポーズですか？

そこは弥富朱音だからと言うべきか。なまじ美人であるが故に、ゲンドウさんポーズにやたらと凄みがある。たぶん他のヤツがやつても、これほど気おされるような雰囲気が出ることもないんじゃないだろうか。

なんかこの雰囲気^{おこそ}に吞まれすぎて、姿勢を正して生唾まで飲んでしまったんだが。

そしてその体勢のまま、朱音先輩は厳かに語りだした。

「それでね幸司くん、ここからが本題。キミが今、優輝くんに対して抱いた感想が、そのまま弥富さんが告白に困ってる、一番のネック^{おこそ}になってることなの」

ええっと、どついつとつすか??

何か色々ありそうですね？（前書き）

ぼあああああ！！

何か文章に納得がいきなです（泣）

何日か空けると、流れがつかみにくくなってしまっ………
たぶん近いうちにこの話は書き直すかもしれない（本筋は変わり
ませんが）

後、感想で香澄嬢のキャラや上木に対する呼び方などがキツイとい
う意見が多かったため、今まで投稿した各話を少しだけ改訂しまし
た。

全体の進行と設定自体は変わっていませんが、今まで作品を読んで
いただけた方々には、これからの香澄嬢に違和感がでるかもしれ
ません。

本当に申し訳ないですが、良い作品にするために受け入れていただ
けると嬉しいです。

何か色々ありそうですよね？

「優輝ってヤツが真面目でパツとしない男だから告白できない？
それってどういうことですか？」

俺は問われてから少し考え込んだ。しかし、いくら考えてもまっ
たく答えが見えてこない。

「やっぱり理解できないって顔ね。詳しく説明すると、香澄さんが
『弥富さん！』……何？」

説明しようとした朱音先輩を香澄が止めた。俺も朱音先輩も、訝
しむように香澄に視線を向ける。

「さすがに私自身のことなんで、上木には自分で説明します」

そう言いきる香澄の顔には、ある種、決意のようなもの覗える。

「……うん、分かった。今言えるところまでで良いから」

朱音先輩も香澄の気持ちを理解したのか、少々躊躇いはありそう
だったが、否定はせずに受け入れた。

「分かってます」

香澄は俺の目をじっと見つめてくる。

もしかしたら、まともに目を合わせたのがこれが初めてなんじゃ
ないだろうか。今まで視線を感じたことはあるが、俺自身まともに
相対などしていなかった。するだけ無駄だと思っていたのだ。しか
し、今はヲタクやらキモイやらの感情を抜きに、一人の相手として
相談されているのだ。

例え嫌いな相手だったとしても、ここまで誠意を見せられてそれ
に答えないほど、俺の人間性は腐っていないつもりだ。

もちろん、嫌な女というイメージは変わっていない。

でも、ここまで一生懸命で思い悩んでいる香澄に、少しは
応えてやるうかと思ってしまった。

そして、目を合わせたまま香澄が口を開く。

「アンタの言うとおり、優輝くんはあまり今どきな男の子って訳じ

やないの……。少し前の私なら、そんなパツとしない男なんて目もくれなかつたけど、あることがあつて優輝くんが好きになつちやつたの」

顔は俯き、いつもの元気な声もない。

「クラスの明るい男とか、女慣れしてるヤツとかだつたら話し慣れるからどんな話をすればいいのかわかるけど、優輝くんのような人とは今まで話したことがあまりないから……」

「なるほどな。つまり、今まで付き合いのあつた男たちとはまったく違うタイプの男だから、何を話していいのかも分からないわけだ」
何となくではあるが、この理由は俺でも理解できる。俺もヤンキーとかギャルみたいなヤツと話さなければならぬような状況になつたら、同じことを思うだろう。仮に同じ年、同じ性別であつたとしても、今まで生活してきた環境が違うのだから戸惑うことも仕方がない。たぶん遊ぶ場所から趣味まで、もろもろ違うから話が合わないだろうし。

優輝つてヤツと何があつたかは知らないが、ここまで香澄とは違うタイプの人だと、その問題も際立つてくる気がする。

これはあくまで俺の思い込みなのかもしれないが、当たらずも遠からずと言つた予想だと思つ。

そして、少しだけ面を上げて弥富先輩を覗き見る。

「それでみんなに人気のある弥富先輩に相談をしたんだけど、先輩も男の人と付き合つたことがないらしいの。告白は何回もされたみたいだけど自分から好きだつて告白したことはないみたいだし、そもそもまだ好きな人が出来たこと無いみたいだし。だから男の子にどうすればいいのかもあまり分からないって……」

それを聞いて弥富先輩は苦笑する。

まあ、自分の恋愛経験の無さを言われたのだから仕方ないのだろう。それほど気にしている様子でもなかつたが……。

しかし、そんな事情で二人は仲が良かったんだな。でも以外だ。あの弥富朱音に恋愛経験がなく、まだ好きな人もいないとは。

「で、アタシどうしたらいいのが全然分からなくなって……………」
そこまで言い切ったきり、香澄は口を閉ざして再び俯いてしまう。
そして、その後を受け継いだように朱音先輩へとバトンが渡される。

「香澄さんが言った通り、私には恋愛経験はないけど、彼女があんまりにも一生懸命だったからね。他の人の相談には適当なにわか知識とか、それらしいこと言って誤魔化すけど、今回に限っては情に走っちゃったって訳。それでこの前の朝、どんなアドバイスしようかって悩みながら歩いてた時にいたのが、幸司くんなのよ」

へえ、俺は本当にただ運が悪かっただけなんですわ。まあ、ここまで心の内を暴露されて手伝わらないなんて言いませんけど、もうちょっと恋愛に頼りになる人選をしてもらいたかった……。

「あの、すごく言いにくいんですが、俺も恋愛なんてしたことないんですが……………」

「えっ？ そんなの見たら分かるけど？」

分かってんのかい！？ しかし、何故だっ！ まだ知り合って数日しか経っていない人に見抜けるものなのか！？

と、納得ができない疑問に駆られる。

「だって、見た目で結構分かるもんよ？ 顔の良し悪しは別にして、彼女がいるのならもう少し自分自身に気を使うはずだし。そんな朝起きてからそのまま学校に来ましたって風貌ふうぼうじゃあ、女の子が好きになってくれるはずが……………ププッ！」

あの……………鼻で笑わないでくれますか？ 結構傷つく現実を突きつけられた気分なんです。

「あの、話の続きを……………」

「ププッ……………。えっ、ええ、そうね。ごめんなさい、こんな時に笑ってたら失礼よね……………ププッ」

この人、どこまでツボに入ってるの？ そんなに俺の彼女がいない発言が面白かったですか？ すいませんね、自分自身に気を使えてないのに、見た目だけなら普通だと勘違いしています。

「……先輩？」

さすがに目の前で自分のことを笑われ続けることは不愉快だったので、少し怒気を込めて朱音先輩を呼んでみる。すると、途端にビクッと震えたように、

「じっ、ごめん」

と、素直に謝罪した。

今はシュンと元気を無くしたように肩を落とし、目を伏せている。さっ、さすがに俺が怒っているとはいえ、こんな反応などされるとコチラが困る。

予想以上に雰囲気が悪くなった部室。

隣では、未だに思い人のことで思い悩んでいる香澄。普通なら「何、先輩に生意気なことしてんのよ!」とか怒ってくるはずなのだが、そんな気配は微塵みじんも無い。

誰も声を発することもなく、静まり返った部室。さすがに居たたまれなさと、罪悪感を感じてしまう。

「すいません先輩。少し大人気なかったです」

とりあえず、こんな空気にしてしまったのは自分の所為でもある気がするので、頭を下げて謝ってみる。

「そっ、そうね。私も悪かったわ、ごめんなさい」

と、なぜか落ち着かないかのような口調であるが、しっかりと返事を返し許してくれた。

「ちよ、ちよっと雰囲気もおかしくなっちゃったし、幸司くんも香澄さんの現状を聞いてどう優輝くんって子との仲を取り持つか考えなくちゃダメでしょ？ だから今日はこれくらいで解散して、明日また話し合いましょう?」

やはり朱音先輩の様子がおかしい。俺が怒った雰囲気を出した辺りから、微妙にキョドっている感がある。

それが何故なのかは分からないが、先輩の言う通り、ここは一度解散して自分で考えた方が良さそうだ。

香澄も未だに元気がないし。

はああー、もう告白を手伝うと決めたことはいいが、香澄の問題も含め、先が思いやられるな。

そして、その日は一度解散となり、各々家に帰宅していった。

ああ、お久しぶりですね？（前書き）

自分でも予想外の新キャラ登場。

でも、話を続けるのに必要だったと言い訳してみる。

ああ、お久しぶりですね？

俺は朱音先輩や香澄と別れ、帰宅の途についていた。
時刻はちょうど五時四十五分を回ったあたりである。

六月の中盤に突入し、夏にも近づいているためか、未だに陽は沈みきっていない。

俺はトボトボと歩きながら、今日部室で聞いた内容を整理し、これからどう香澄に協力しようかと思いに耽^{ふけ}る。

先輩や香澄の言をまとめると、香澄が今まで接したことの無い相手へと好意を寄せてしまったことよって、どうアプローチを掛ければいいのか分からないということらしい。

確かに大人しそうな優輝と今どきのギャルっぽい香澄ではお互いの認識や価値観までもまったく違うのも頷ける。

俺自身も女の子と付き合った経験もないし、告白したことすらない。もちろん告白されたこともない。

正直、俺の身に余る相談を受けたような気がしてならないが、何か妙案を考え付かない訳でもない。

それを香澄が受け入れ、実行するかは別としてだが……。

俺は明日、香澄に説明をするために、頭の中でどうすれば優輝と関係を持てるのかをモンモンと悩みながら家に帰宅した。

俺の住んでいる家は、鷺峰高校から徒歩三十分の位置にある1DKのアパートだ。

主に生活する部屋は洋風の内装で、キッチンや他のスペースも合わせると全体の広さは11.5畳もある。しかもセパレートタイプという、俺にしてみれば絶対に外せない条件も満たしている。

布団や机などは実家から送ってもらったため、真新しい感は小さくなってしまったが、唯の高校生の俺が一人暮らしをするには

充分な生活空間と言えるのではないだろうか。

俺は鍵を開け、玄関に靴を脱ぎ散らかしたまま部屋へと赴き、制服から身軽なジャージへと着替える。流石に室内でこれくらいラフな格好をしても、誰かに咎められることもないだろう。普段の生活に五月蠅い親も今はいねえーし。

グウウウウ……。

あつ……。

チラリと時計を見る。

時間はすでに六時半を回っていた。

……もうこんな時間か。思春期真っ盛……じゃなくて、成長期真っ盛りだからな。こんな時間に腹が減るのも仕方ないだろう。

部室に寄り、考え事をしながら歩いてきた所為でいつもより帰宅が遅くなったみたいだ。いつもなら授業が終わって速攻帰るから、五時過ぎには家に着いてダラダラしている。高校に入学してから、放課後まで学校に残るなんて今までなかったし。

アレだよ？ 別に友達がいらないから放課後に遊べないとかじゃないよ？ ほらっ、俺って一人暮らしだからさ。早く家に帰っているいろやらなくちゃいけないことがあるからだよ？

などと、どうでもいいことを考えながら食事の準備を始める。

今日の夕飯のメニューはチャーハンだ。昨日もチャーハン、一昨日の夕飯もチャーハンだった気がするが……まあ、好物だからいいだろう。

最近は男も料理をする時代だとか言ってるが、すべての男が料理をマスターしていると思っではいけない。一応、簡単な料理くらいは作れるが、そのレパートリーの少なさといったら自分で数えても目を覆いたくなる。だが、その少ないレパートリーの中でチャーハンを作りまくっているせいか、チャーハンだけはやたらと美味しい。他に食べてくれる人がいないため主観的な意見しか言えないが、

その辺の中華の店で食べるヤツよりも美味しいんじゃないかと自負している。

材料も残り物を使って作るという訳ではなく、チャーハンのためにスーパで買い物をすると言っても間違いいではないしな。

オレ流、激ウマチャーハンをたつぷりと堪能した後は、パソコンの前でグダグダとネット小説を読み漁る。

最近はVRMMO系や、神様の手違いですんごいチートな能力を手に入れたぜ、俺TUEEEE!!!系を読むことが多い。ああ、こんなに可愛いヒロインたちが現実にいねえかなと、己の理想を脳内で妄想し続けるが、現実はそのなに甘くない。

顔だけ良い女の子なら二人ほど思い浮かぶが、どっちも一癖も二癖もあるものすんごいヤツらだ。

本当に現実には優しくないと思い知らされるぜ……。
と、悲しみに暮れていた時、

T R R R R R R R ……、 T R R R R R R R ……。

と、携帯が鳴り始めた。

その機械音を聞き、俺の身体はビクツと震えてしまう。

コレは別に電話に恐怖しているという訳ではなく、普段ほとんど鳴らない携帯電話に驚いただけだ。

たぶん家族からは掛かってこないと思うから、下手な勧誘か間違い電話か？ と、恐る恐る携帯へと手を伸ばし、画面を見てみる。

そこには登録されていない番号が表示されていた。

家族の番号は全員登録されているため、知らない人からの電話の可能性が高い。

電話に出ないという選択肢もあるにはあるのだが……さすがにそれは問題がある気がする。自分の携帯が使えなくなり、誰かの携帯

を貸してもらっているという事態もないこともないしな。

俺は仕方なく通話ボタンを押し、耳に携帯を近づけた。

「……もしもし、上木ですが」

とりあえず無難に名前を言ってみる。

『やあ、幸司。久しぶりだね、元気にしてたかい？』

「うん？ その声って、もしかして薫か？」

聞き覚えのある声だったが、一応確認してみる。

『なんだい？ もう僕のこと忘れてしまったのかい？ 幸司がそれ

ほどまで薄情な男だったとは知らなかったよ』

どうやら、少々癪に障ってしまったようだ。

「わっ、悪い悪い。っで？ いきなり電話してきて何か用だったのか？」

『何か用がなくちゃ電話してはいけない間柄だったかな？ 仮にも僕たちは小学生から中学生まで一緒のクラスだったじゃないか。言ってしまうえば幼馴染と呼んでも間違いではないだろう。幸司は地元から離れた高校に入学して離れ離れになってしまったが、僕は未だにキミのことを友人だと思っていたんだけどね』

……何か、さらに怒らせてしまったみたいだ。鷲峰高校に入学してから嫌なことばかり起きたせいで、少し心が病んでいたらしい。

久々に友人と言われたことに、少しだけ心の汗が流れそうだ。

「……悪かった。少しこっちで色々あってさ。素直に謝るよ」

『うん？ そっちの生活は上手くいってないのかい？ 何かあったら相談ぐらい乗るよ？』

「いや、それほど問題があるって訳じゃない。そんなに心配してもらわなくても大丈夫だ」

少し強がってしまったが、別に虐められているって訳でもない。

それに、これくらいで相談するとか男としてどうなの？ って感じがするし。

仮じゃなくても俺は男だから、それくらいのプライドくらいあるな。

『……………幸司がそう言うなら別に構わないけどね』

何か含みのある言い方だな、オイ。

『まあ、僕もようやく高校生活が落ち着いて久しぶりに話そうと思っただけだから、少しこのまま他愛無い話でもしようか』

「そうだな。最後に話してから二、三ヶ月経ってる気がするし」

そうして、俺たちは会話を終えた。

最後に、『携帯を新しくしたからこの番号を登録しといてくれ』

と言われたので、電話を切った瞬間、猛スピードで薫かおるの番号を登録しておいた。

久しぶりに友人と呼べる薫かおると話せたおかげで、今までの鬱かおるな気持ちかおるが少しだけ解消された気がする。それに、明日からまた頑張れる気力も湧いてきたしな。

明日も学校があるし、部室にも顔を出さねばならないだろう。

一応、香澄が優輝に話しかけられるような案を考えたまではないが、香澄がそれを納得するかだけが心配だ。

そんなことを考えながら、俺は二ヶ月ぶりに良い気分のまま眠りについた。

この10話って要らなくね？ って、思っくらいのお話。（前書き）

タイトル通り、本筋とはあまり関係ないお話です。

ただ、書きながらどんどん違う方向へと進んでしまったと言いついてみる。一応書きたいことは決まっていたのに、何故こうなっってしまったのだろうか。

たぶん次話で少しだけこの話に触れると思うので、まったく関係ないと言いつてではないのですが……儘ならないものです。

後、少しだけパチンコネタが本文にあります。高校生の主人公でそんなネタは相応しくないとと思われるかもしれませんが……。

でもまあ、最近はゲーセンにもあることですし大丈夫かなと……。

過去、私は友人と映画を見る合間にゲーセンでエヴァ打ってたんですが、隣にはたぶん小学生かと思われる少年が打ってましたし。

（ちなみに私はメダルを出しまくり、映画の時間になったので台ごとメダルを譲渡しました）

この10話って要らなくね？ って、思っくらいのお話。

明くる日の朝。

清々しい陽気に包まれた快晴。

俺は穏やかな日差しを身体全体に浴びながら、いつもの通学路を歩いていた。

学校まで残り半分といった十字路で、見慣れた女の子が左の角から顔を出す。ただ歩く後姿という何でもない動きであるにも関わらず、何故あの人はこれほど絵になる美しさを醸し出せるのか。

一般ピープルの俺には、到底真似できない雰囲気である。

普通の男ならば、ああ、今日は朝から素晴らしい人に出会えた。

朝からツイてるな俺。今日のラッキーアイテムである黄色のハンカチを持っていて良かった。教えてくれた綺麗な女子アナさんには感謝しなくちゃな。

くらいは思うかもしれない。

だが、現実是非情なもので、俺はあの人の本性を知っている。

まだ出会って数日と付き合いこそ浅いが、あの人に関わると碌な事にならないのは経験済みだ。

しかも、一番初めの出会いと同じシチュエーションじゃないか、コレ？

ブルルッ。

ああ、何か悪寒を感じるわ。

別に嫌いというほどでもないが、今日の放課後また顔を合わせることになるんだし、朝の通学時間くらいは平和に過ごしたい。

それならば、俺がとる選択肢は一つ。

よし！ 考えすぎかもしれないが、ここは安全を重視して別の通りから行こう！！

目前を颯爽と歩く麗人は、運よくコソコソ後ろを歩く俺に気づいていないみたいだ。これは好機、いやっ、激アツな状況だろう。分かりにくければこう言い換えよう。

赤文字、擬似連四回、群予告、デカ枠カットイン、奇数リーチへのランクアップ、最後のオマケで役物始動ぐらいのチャンスな状況だ。

なんかもう99,0パーセントぐらいの確立でこのままフェードアウト出来る可能性大だ。

そう思い立ったが吉日、俺は“固有能力：気配遮断”を発動し、壁際に寄り電信柱を盾に隠れ潜む。そして、次の角を曲がろうとしたその瞬間、

「キミ、そんな所で何してるんだい？」

背後からダンディーで渋い声がかかった。

前に気を取られすぎていて後ろにまで気が回っていなかった、と慌てて背後を振り返る。

そこにいたのは、ピシツとした制服を着込んだ警察の方。双方に目は、怪しいヤツを見つけたとでも言うように訝しく細められていた。

「ふえっ……？」

突然の国家公務員さんの登場に、情けなく呟いてしまう。

そして、今の俺の行動を思い返す。

目前の美人さんを見ながら電信柱に隠れ潜むオレ……。これって、客観的に見るとすごく怪しい人なんじゃないかと。

すぐに自分が置かれている状況を理解し、顔の表情が呆然から驚愕へと変化していった。

そして、

「怪しいな。学生のようなだが、とりあえず話を聞かせてもらおうか？」

そのセリフに俺は慌てて逃げ出そうとする。

おそらく落ち着いて考えれば、こんな最悪な行動パターンは選択

しなかっただろうが、今の俺は慌て過ぎてそこまで頭が回らないほど気が動転していた。

すると、警察官は逃げ出そうとした俺の腕を掴み上げた。そのまま腕を背に回され、身動きが取れなくなる。

「なんで逃げようとするんだ？」

「……ツッ！」

腕を捻り上げられた痛みにより、苦痛な声が漏れる。

ヤバイ、このまま行ったら警察署まで連行されそうな勢いだ。

どっ、どうにかしてこの場を切り抜けなければ！！

けど、俺がこの場で訳を話しても信用されるか？ 最初の印象は最悪。思わず取った行動とはいえ、逃げ出そうとした時点で犯罪者予備軍に格上げされてそう。

けっ、結構ツンでいる状況じゃないかな、コレ？

どうしようか悩んでいた時、

「すみません」

と、背後から声がかかる。

俺を取り押さえようとしている警察官も反応を示し、二人合わせて声がした方へと振り向いた。

そこに毅然とした態度で立っていたのは、先ほどまで気づかれないうようにしていた弥富朱音先輩だった。

風に靡く長い黒髪をかき上げながら、俺たちに花の咲くような笑みを浮かべている。

「あの、幸司くんが何かしたんですか？」

朱音先輩は俺に指を向けながら、動きが止まっている警察官に優しい声音で尋ねた。

取り押さえる力が弱まったため、チラッと俺を取り押さえてる人に視線を向ける。そこには、突然美人さんに話しかけられて少々顔を赤くしている警察官が……。

オイ、気持ちは分からなくもないけど、なに職務中に見惚れてるんですか、アナタは？

「あの……聞いてます?」

フリーズしている警察官に再度声を掛ける。

「あっ、はい。聞いてますよ。この男が先ほどからアナタを見ながら怪しい動きをしていたので取り押さえていたんです。危ないので離れていてくださいね」

爽やかな笑みを浮かべながら返答する。

なぜか俺の腕を押さえる力が強くなっているみたいだが……。これはアレか? 綺麗な女性の前で、俺は強い男なんだぞ。ってか。こつきたい年頃なのか? この警察官の人も若そうだし……。たぶん、こぼれ進るパッションの何かとどが止まることを知らないのだろう。

……って、本当に痛い、イタイ! そろそろ腕が限界です!!

声も出せない痛さに、俺の顔は苦渋に満ちてしまう。

「離してもらっても大丈夫ですよ? 彼は私の知り合いなので」

「へっ? 知り合いですか?」

若い警察官が間の抜けた声を上げる。

「はい、そうです。同じ学校で、同じ同好会に入ってる後輩です」
何か普通に言ってますけど、俺、いつの間に同好会に入ったんですか?

「そつ、そうなんです。でも知り合いの割りに怪しい行動してたように見えたんですが……」

「彼って……元々おかしな所がある人なので」

何言っちゃっててくれるの? この先輩。そんな可哀想な人を見る目を俺に向けないでくださいよ、泣きそうになっちゃうじゃないですか。

ってか、そんなんで納得するなら警察官はなんていらないうろが……。

「ああ、そうなのですか。それは仕方ないですね、ハツハツハツ!」

納得しちゃったよ、オイ!? 美人さんだからか!? 美人さんだから信用してもらえるのか!?

クツ、なんてブサ面に優しくもない世の中なんだ。もう何ていうか、生まれた瞬間から損をしている気分になってきた。

「あのく納得していただけたのでしたら、腕を離してもらってもよろしいでしょうか？」

「ん？ ああ、すまないねキミ。大丈夫だったかい？」

「……はい、なんとか」

組まれていた腕が、まだ何かと痛む気がしないでもないが、それを言っても後が面倒そうだからやめた。

そうして警察官は俺と朱音先輩を見て、

「それでは、事件ではなかったようなので本官はこれで失礼いたします。キミもこれからはあんな怪しい行動は慎むように」

ニカツと爽やかに笑い、口から覗く白く並びの良い歯が煌く。

そして、再びチャリに跨り颯爽と立ち去っていった。

「……………」

俺は黙り込み、その場に立ち尽くした。すると、

「幸司くん、なんで黙ってるのかな？ ここは私に言わなくちゃいけないことがあると思うんだけどなあ」

と、隣から助けてくれた人が、ニヤつきながら肩をポンポンと叩く。

「……すいません。ありがとうございました、朱音先輩」

「うんうん、よろしい。助けてもらったら感謝するのは当たり前だよね。それで詳しいことは聞いてなかったけど、どうしてあんなことになったの？」

彼女の疑問も当然だろう。警察官に、朱音先輩を見ながら怪しい行動をしていたと言われただけだし。

直接、「朱音先輩に見つかる厄介なことになりそうでした」なんて言えるはずもなく、口を噤んだままどう言い訳しようかを考える。

しかし、朱音先輩は俺の様子を見て勘違いしたのか、

「幸司くん。さすがに私が学校で一番綺麗な人だからってストーカー

「はいけないと思うよ?」

「それは断じて違います!」

何勘違いしてんの、この先輩!? むしろその逆だよ! 朱音先輩の後を付いていこうじゃなくて、逆に離れようとしてたんだよ! ? と、言い訳できないのが悲しいところだ。

ここで正直に答えてみる。どうせ朱音先輩のことだから、「私と会おうと厄介そうだから別の道から学校に行こうとした? へえ、そうなんだ。私いまのですごく傷ついちゃったし、学校の友達に一年の上木幸司くんって子に酷いことされたって言いふらしちゃうかもしれないあゝ」なんてことになりかねない。

ブルルルルルルッ。

最悪の結末を予感し、また悪寒を感じてしまう。しかも、最初に先輩を見つけた時よりも嫌な予感がバリバリだ。

妖怪アンテナとかあったら、髪の毛がピンピンに逆立っているだろう。たぶん一本どころじゃなく二、三本くらいは。

そんな俺の尋常ではない雰囲気を感じ取ったのか、さすがの朱音先輩も頬を少しだけ引きつらせる。

「だっ、大丈夫? なんかすっごい負のオーラを感じるんだけど…」

…

その声にハッと目を覚まし、優しくない現実の世界へと舞い戻る。俺の妄想の世界ですら優しくなかったが……。

「はっ、はい大丈夫です。少し嫌な未来を想像してただけなんで」

「はっ、ははは……そっ、そうなんだ。もうこれ以上ツッコんで聞かないけど早く学校行かないと遅刻しちゃうからね」

「……ありがとうございます。俺なんかに気を使ってくれまして」

「いいのよ。それじゃあ早く学校に行きましょうか」

それは勘弁してくださいっ!

部室ならともかく、一緒に登校するだけで学校中の男どもに目の

敵にされてしまうので。たぶん全員分合わせたら、フォノン・メーザー並の殺傷力を持っていると思う。

それくらい、噂に敏感な朱音先輩なら分かることでしょうに……
って、

俺を置いて先に進んでいるだっ！？

さっ、さすが朱音先輩だけ……。それくらい俺に言われるまでもなく、自分でも分かっていますよってことか。「早く学校に行きましようか」ってセリフもただ説明が省かれてただけで、詳しくは「私は一人で先に行くから、幸司くんも早く学校に行きなさい」って意味だったんだな。

自分の考えていた展開になっているはずなのに、何故か負けたような気分だ。

そしてそのまま、俺は学校に向けてトボトボと歩いていく。

背中に哀愁という名の悲しみを背負って……。

この10話って要らなくね？ って、思っくらのお話。(後書き)

たぶん今年最後の更新になるんだらうなあ……

後、感想や評価をいただけると嬉しいです。
作者の意欲がグングン上がります!!

あの、そろそろ離してくれませんか？（前書き）

新年、初投稿！！

……の割に忙しすぎまして、一番短いです（・・”・・）

こっ、今度の話はもう少し長くなりますよ？ 本当だよ？

あの、そろそろ離してくれませんか？

俺は今、大急ぎで部室に向かっている。

授業も終わり、いつものように特に用事もなかったので真っ直ぐ部室に向かおうと立ち上がった時、担任の先生から職員室に来るよ
うに言われた。

なぜ呼ばれたのかはまったく分からなかったが、教師に言われたことを無視する訳にもいかず、席を立ち、さっそく部室に向かおうとしていた香澄に向かって視線だけで謝罪する。お互い言葉自体を交わすことはしなかったが、一回だけ縦に頷いてくれたので了解はしてもらえたのだろう。

これでまた来るのが遅いと怒られることはない、半ば安心して職員室へと赴いた。^{おもむ}

「失礼します」というお約束のセリフを吐き、職員室に入室する。

一直線に担任の先生が座るデスクへと進んでいき、デスクの上に乱雑に置かれた書類と格闘している我がクラスを担当している教師へと話しかける。

「先生」

「ん？ ああ、上木か」

と、頭をボリボリ掻きながら、眉間に皺しわを寄せた苦い顔でコチラを振り向く。口にプラスチックの禁煙パイポを咥くわえてるから、タバコが吸いたくて吸いたくて堪らないんだろうな。この教師、仕草と態度だけは完璧にオヤジ以外なんでもないんだが。こんな教師でも三十路前の女性だっていうんだから、誰でも驚くつての。

顔の造形とスタイルだけは整ってるから、もう少し外ヅラに気をかければ生徒たちに美人教師と言われ人気が出るだろうに。もう、仕草だけでプラス要素がすべて覆い隠されてしまっているような感

じだ。

もつたいないというか、何というか……うんっ、拙つたないという表現が一番しっくりくるなっ！

「……上木、今失礼なこと考えてなかったか？」

なんか先生がギロリとした目で俺を睨みつけてくる。眉間に寄った皺を数えただけでも三重奏してるんですが。ってか、マジで怖いよ。なまじ美人なだけに、怒った顔にもものすごい威圧感がある。「いつ、いえ、決してそんなこと考えてないですよ？　ただ先生の顔を見ると、何かとお疲れのようだなあ〜なんて……」

ガシッ。

……あの、何で肩を思いっきり掴むんですか？　ちよつと痛いんですけど。

「分かってくれるか、上木。私がどれだけ苦労して、どれだけ気を病んでいるかを」

いえ、正直分かりませんが……。さっきのはつい口から出た言い訳みたいなもんなんで。

肩に置かれた先生の手ギリギリと力がはいる。

……あの、だから肩が痛いんですけど。

「最近はない、教師という仕事を勘違いしている親が多いんだよ。子供が喧嘩して学校に処罰を要求してきたり、酷いのじゃあ遅刻する子供を家まで迎えに来いなんて、普通に考えたらありえんだろう。学校や教師にもそりや責任の一端くらいはあるかもしれないが、全部が全部、私たちのせいってのはおかしくないか？　私たちの仕事は子供を育てることよりも、導みちびくことに意義があるのだから」

なんか、最後には「私、正論言っただけ」みたいな雰囲気出してるんですが、

それってただの愚痴じゃないですか！　だいたい、先生の仰おしる導みちびくべき子供相手にそんなことぶつちやけないでくださいよ！

……つて、だから肩に力入れすぎなんだつて！ 痛いからもう勘弁してください、お願いします！！

「せつ、せんせい、肩が、そつ、そろそろ限界です」

愚痴を溢こぼしてしまっただけほど苦悩しているのか、顔を伏せながらも俺の肩を掴む手の力が衰おとろえることはない。さすがに我慢できなくなり、絶々（たえだえ）に離すように懇願こんがんしてみる。

「ん？ ああ、すまなかつたな。少し感情的になっちゃった」

感情的じゃなくて、暴力的に近い感じですけどね！！ ……後が怖そうだから言えませんが。

と、ようやく肩から先生の手の圧力から開放された。

……たぶん肩真つ赤になってるんじゃないかな、俺の両肩。朝の警察官との一悶着いんせきといい、今の先生との絡みといい、今日つて俺の厄日やくじつなんじゃないか？

ちゃんと今日も朝の占いコーナー見てきたんだけどなあ。まあ、本日のラッキーアイテムである“黒いビーチサンダル”なんて学校に履はいてこれる訳わけなかったんだが……。

お互いがようやく落ち着いたところで、先生が話し始める。

「それじゃあ本題に入るか。お前をここに呼び出した用件だが……
実はだな、まだお前の保護者から」

俺はようやく先生から開放され、職員室を後にした。

はあああ、今日は本当に厄日やくじつだな。

まさか家の両親りょうしんの件で呼び出しがかかるとは。あんまり話したくないんだが、今回は理由が理由だから仕方ないし……今度電話でもするか。

と、考え事をしながら未だにヒリヒリと痛む肩を擦っていると、部室の扉の前にたどり着く。

あの、そろそろ離してくれませんか？（後書き）

たぶん、今回の伏線っぽい話が回収されるのは当分先でしょう。

ちよいちよいストーリーにも関連してきてしまうので、ここで出しかなくちやなあゝ、と思い立って挿入しちゃいました。

友達ってなんだろう？ (前書き)

ふいふ、ようやく投稿です^^

れて、変な空気になってただろうし。最初はちょっとだけ盗み聞きをすることに罪悪感もあったが、逆に部屋に入る前に、楽しそうな空気をぶち壊してしまう心構えが出来て良かったかもしれん。

それでも結局、二人がいる部室に入りづらいのは変わらないんだけどさ。

今日はもういろいろあつて疲れたし、もう家に帰りたくなつてきた。でも、一応部室に集まるって約束しちゃったしなあ。さすがに約束を破るのは気が引けるし、ここは何も聞いていなかったことを装って入るしか……。

こんなこと言うのもなんだが、俺ってなかなか律儀な男だよな。と、自分を慰めながら取っ手を回してドアを開ける。

「遅れてすみません」

二人は俺が来たことに気づき、会話をやめて目を向けてくる。そして、

「遅かったじゃん。先生に呼ばれてたみたいだけど、何かあったの？」

香澄がテーブルに肩肘をつきながら尋ねてくる。

「まあ、何かあったと言えばあったけど、俺の家庭のことだから気にしないでくれ」

「ふ〜ん」

と、あまり興味がないように返事をする。

お前から話を振ってきたんだから、もうすこし喰いついてくれてもいいじゃん。家庭の話はあまりしたくないから、今は助かるけども……。

俺はいつもと同じ朱音先輩を前に、香澄を隣にした、定位置のイスに腰掛けた。

すると今度は朱音先輩から、

「幸司くんが来るのが遅かったから、今まで弥富さんに朝に起こったキミの大事件について話してたんだよ？」

「そっ、そうなんですか？ かなり恥ずかしいんで、あんまりバラ

さないでほしいんですが」

ただの陰口だと思っていたのに、まさかの張本人にカミングアウトだと!?

予想外の展開に少しだけビックリしてしまう。

「だって面白いじゃない。私と同じ高校の制服着ていてもストーリーに間違われるなんて、そうそうない話だよ?」

「それでもですよ。あんまり親しくない人のことをバラすのはよくないですよ」

そこで、俺は大きな溜め息をついた。

「えっ? 私たちって、もう友達じゃなかったの?」

「ハア???」

なんか香澄まで口をポカンと空けて呆けた顔をしている。俺だっ
てそうだ。一瞬、朱音先輩が何を言ったのかを脳が理解してくれな
い。

ええっと? 俺たちが友達って、どういうことでしたっやろ。

「なんで二人ともそんな信じられないみたいな顔してるの?」

いやあ、なんと言いますか。いきなり俺たちが友達なんて仰るから驚いているだけですよ。

たぶん香澄も同じ考えなんじゃないかな? 朱音先輩とだったら友達になれて嬉しいだろうけど、俺と友達になるなんて……ね。香澄がクラスで俺がキモイヲタクだって言いふらした訳じゃないが、クラスメイト全員に嫌われている俺と友達になるのは、さすがに抵抗はあると思う。

俺と香澄は、未だに無言のままだ。すると、

「こっとうおバカな失敗とか出来事って友達同士で話すと凄く楽しいし、盛り上がるものじゃない? だから香澄さんも、あんなに幸

司くんのこと笑ってたと思うんだけど。普通だったらそこまで楽しそうに大笑いできないよ?」

朱音先輩の言葉を聞き、香澄は雷に打たれたようにビクツと身体が震え、顔を赤らめて縮こまる。

俺はというと……。

特に何も反応を示すことなく、静かに考え込んでいた。

先輩の言うとおり、俺が部室に入った時、今までクラスの女子共がするような目を香澄は向けていなかった。笑い方も、クスクスといった馬鹿にしたような声ではなく、本当に面白い話を聞いたとでもいうような、とても明るい笑い声だった。

今思い返すと、最初は自分の嫌な出来事をネタにされ笑われた割には、いつものような不快感をそれほど感じた訳でもない。

しかし、

それだけで俺たちが友達というのは早計ではないだろうか……。

確かに先輩の言うことも一理あるのかもしれない。

しかし、俺と朱音先輩は出会ってまだ数日。

さらに、香澄に至^{いた}っては、最初の印象が悪すぎる。

最近は、優輝という男に向ける恋心の熱心さに、コイツも少しは良いところはあるのかもしれないと思っではいるが……正直な話、それだけの気持ちしか持っていないのが本音である。

なのに、先輩は俺たちのことを友達だという。

さすがに無理がある極論ではないだろうか……。

チラリと香澄を覗き見るが、彼女も彼女で何を考えているかわからないほど、口を結んで黙り込んでいる。

なんか、目を改めて集まった割には、前回と同じ二の舞になりそうな雰囲気である。

とりあえずこの話は置いておくとして、香澄の告白の作戦を決めなければ。

「あの、朱音先輩。とりあえずその話は今度するとして、告白の…
…作戦？ を話し合うのが先だと思えますが」
「そっ、そう。上木の言うとおり、優輝くんにごうやって告白する
かの作戦を話し合いたいです!!」
香澄まで俺の意見に乗ってきた。しかもすごい勢いで……。
朱音先輩もこのあたりが話の潮時だと感じたのだろう。小さく頷
き、了解の意を示した。

「それじゃあ、みんなが考えてきた意見を出し合いましょっか」

友達ってなんだろう？（後書き）

おかげ様で評価が200ポイントに到達しました！！

評価をしていたいただいた方や、お気に入り登録していただいた方、さらにはここまで読んでいただいた方。

皆様、本当にありがとうございます！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5716z/>

恋のキューピッド君

2012年1月6日19時00分発行